

Hayakawa Hiroshi

経営コンサルタント。1991年に独立。介護事業に関する独自の調査に基づいたデータ分析を各誌・紙に発表。著書に「介護人材創造塾」(筒井書房)、「介護保険改正に勝つ!経営」(年友企画)、「データで徹底分析 介護事業の最新動向と経営展望」(日本医療企画)、「介護事業の羅針盤」(シルバー新報叢書)など。
http://www.hayakawa-planning.com
ブログ: http://ameblo.jp/hayakawa-planning/

介護マネジメント塾

経営(継承)のツボ

流水不腐

転期に立つ経営者の資質の考え方④



早川浩士

(有)ハヤカワプランニング代表取締役

「人善不知足。既平隴復望蜀」

「望蜀」という言葉がある。

一つの望みを遂げて、さらにその上を望むこと。足ることを知らないこと。つまり、きりがないことを言う。

出自の「後漢書・岑彭伝」には、「人、足るを知らざるに苦しむ。既に隴を平らげ、復た蜀を望む」とある。

建武十(西暦34)年、漢王朝の後漢、光武帝は、中国を統一。

この間、最も頑強に抵抗したのが、隴の隗囂と蜀の公孫述の二人だ。

建武八年、岑彭は帝に従って隗囂を攻めた。その際、帝は、自らの野望が次から次へと広がることを嘆いた手紙を岑彭に送った。

「一つの都市(隗囂の西城と、公孫述の上郡)が落城したら、ただちに兵を率いて南へ進み蜀を討つだろう。人間というものは満足するということを知らないから困る。私は、隴を平定したうえに、さらに蜀の地を望んでいるようだ。その私も、戦をするたび、髪の毛がめつかり

白くなり、年老いてきたのだが……」
隗囂は亡くなり、その子は漢に降り、岑彭は公孫述に暗殺され、公孫述も蜀の成都で滅んでしまう。

光武帝はついに蜀を平定して、全土統一を果たすことになる。ここから、望みが一つかなうと、また別の望みが出てくる。人の欲望に限りがないことの例えとして「望蜀」の故事が用いられ、「望蜀の嘆」や「思うこと、つ叶えばまた一つ」という言葉もある。

また、知足(足るを知る)から「唯足知」という考え方も生まれた。

「流水不爭先」

流れる水は淀むことなく腐らないとい

う意味を持つ「流水不腐」の出自は、『呂氏春秋・季春紀・尽数』にある。

逆に解釈すれば、「流れが止まった水は、淀んで腐ってしまう」となる。

介護の社会化の喧伝とともに、早10年目を経た介護保険だが、この言葉が、大言壮語ともとられかねない体たらくの状態にある。

川を流れる水は、先を争って流れているように見えるが、高きから低きに流れているにすぎず、流水は先を争わずという「流水不爭先」もある。

その意は、水が流れを争い、競っているように見える人は、そのように見ている心のなかに「争い事」が満ち満ちて、目が曇っているからであるというのだ。

要介護認定者の急増を「流水争先」ととらえたのであろうか。介護予防や、今

春から新たにスタートした「新・要介護認定」などは、被保険者の心を淀ませるばかりか、腐らせてはいないだろうか。

他方、事業者団体は、サービス提供の種別の数だけ形成されているため、介護報酬の改定への要求はどうしても我田引水に陥りかねない。

最重要事案は、将来の介護業界を担う20〜30代の介護従事者の処遇改善や定着促進、育成を制度設計に組み込むことへの是非であり、介護報酬の地域別単位や区分の変更、加算等のさじ加減によって解決を誤魔化してはなるまい。

また、介護従事者に求められることは、介護福祉士資格や高い介護技術習得とともに、自らの生活観・労働観を通した人間観の形成であり、下積み力である。

事業者団体は、他団体と報酬の水準を競わず、業界全体の底上げを図るといって「流水不爭先」の姿勢を貫くとともに、「流水不腐」に徹することである。

まずは、当局自ら「因循姑息^{*2}」な考え方を改め、「先義後利^{*3}」の要ともいえる「介護の社会化」をうやむやにさせないことである。

人は、足ることを知らざるに苦しむものであり、隴を得て蜀を望むのである。
3年先の改定を踏まえ、知足と不知足の国民的議論が介護経営にも問われる。

*1 本誌2006年7月号本欄参照
*3 本誌2009年5月号本欄参照

*2 本誌2009年4月号本欄参照